

2.2 原子力誤解を考える登山電車方式

ここでは、例えば放射性物質の放出に関する誤解を想定して、どのような要因が問題かを考えてみましょう。それから推測されることは、誤解の、イ) 科学的側面、ロ) 常識的側面、ハ) 情緒的側面、ニ) 新しい世界観の獲得、の4段階に別けられる、というものです。従って、情緒的原子力誤解の解決に当たっては、イ)、ロ)、ハ)、ニ) における問題の解の和が求めるものになると考えるのです。そうすると、これらの各プロセスの解の和をもって誤解が解けたとなります。

このとき、登山電車の各駅は、始発が‘誤解駅’、次が‘科学駅’、3番目が‘常識駅’、4番目の駅が‘情緒駅’、最後の駅が‘アイデア駅’とします。アイデア駅に到達すると原発報道に対する目が肥えます。誤解を持っている人がどの駅で下車するか、それが理解の程度になります。頂上にまで達し、新しい世界観を持てれば素晴らしいことでしょう。誤解は一つだけでないですから、複数の誤解に挑戦すれば、原発あるいは原子力に関して、広い視野を持つことができます。そうするとどうなるのでしょうか、読者が自分で体験することですが、マスコミの言っていることに対して‘目が利く’ことになります。原発反対派と賛成派は日本の将来という価値観を共有できる機会が増えることを期待したいのです。そうすると原発の推進、反対について今よりはるかに合理的な原発政策を議論し実現できます。ここで強調しておきたいことは、アイデアの駅に到達することでしょう。

(1)登山電車の駅 原子力誤解の答を得るプロセスをいくつかの部分に分けてみます。この部分的問題は現実的に解けることが前提です。そのプロセスを、次のように考えることにします。

イ) まず誤解を科学的に理解する。ロ) 次に、理解した内容を常識と合致するように修正する。ハ) そうして得られた暫定解が個人の情緒的な好みに合うかどうか、判らないので、特別の工夫をする。それは従来のやり方に比べれば、コペルニクス的転回といって良いものでしょう。情緒的側面に関わる問題点を解決できても、解答は全く個人差がありますがそれを容認します。この時点で最初の誤解と比べてどこが違っているか、それを反省してみるのは有用でしょう。世界観が広がっていれば、登山電車に乗った効果は抜群でしょう。そうでなければ、やり直しとなります。世界観が広がれば、始めの誤解を安心して記憶の奥に封じ込めておくことができます。きっと‘さわやかな気持ち’を感じることができるでしょう。

二) 情緒の課題が解決できたとしますと、理想であります、志あるいは自己の問題を乗り越えて全体に奉仕するという志を持つ問題に至ります。子々孫々のため、永きにわたるこの国の将来に尽くさねばなりません。ここに至って初めて原子力の利用の最終状態に至るのです。それは具体的には何でしょうか。過疎化、少子化、人口の東京一極集中、産業の衰退、国際競争での敗北、等々、これらの来るべき悲惨な状況を解決できるものは何でしょうか。それは原子力において他に有効な手段はありません。反原発マスコミがしてきたことは何なのでしょう。事故の恐怖を煽るだけだったのではなかったか。風評被害を焚き付けて多くの素朴な住民を苦境に追い込むだけだったのではないのでしょうか。

ここで、プロセスをまとめると、以下のようになります。

イ取り敢えず、誤解の科学的側面を取り上げ、科学的な誤りを科学的に正す。ロ科学的理解は必ずしも現実に適用するのに適していない場合が多いので、常識（社会通念）を持ち込むことの必要性を説く。

ハ科学的側面と常識的側面に基づいて矯正された回答は十分に納得してもらえない場合があります。あの人がいうから納得できないというのはよくあることです。電力会社のいうことだから信用できない、という誤解は反原発マスコミによって国民に刷り込まれていて、なかなか抜きがたいものがあります。子供可愛さからくる誤解が抜きがたくなるのも情緒による障害です。この場面をどのように捌くか、腕の見せ所といえます。ここでいわゆるコペルニクスの転回が望まれます。科学と常識で矯正された誤解が情緒によってブロックされている状況の打破には画期的な思考の展開が必要です。それは、統計に照らせば正しい説明であっても、情緒がそれを納得できないのであれば、その誤解を認めてやろう、という姿勢でもあります。しかし、それには前提があります。その認識は統計上まればであるから、決してマジョリティーにはなれなくて当然とします。ソクラテスの「無知の知」ではありませんが、そのような条件の下で、1mSvの妥当性は限定的に市民権を得るとします。

思うに、社会はいろいろ異なった考えや価値観を持った人々が共存しています。それでも特段の摩擦はめったに起きていません。調和して生活しています。1mSvについても懸念を示す人、正しく理解する人、の共存があってもよいのです。この時期待たれる大事なことがあります。‘万が一問題の人’が、他の案件、例えば、事故時に避難を余儀なくされ、除染によって帰還できるようになったとき、自らと1mSvの意味を科学的に理解する人との違いを容認すべきでしょう。

心で納得いかなくても他の振る舞いに理解を示すことが必要です。これはまた、1mSvの除染が科学的に無駄であると判っていないながら、1mSv以下の除染を要求する組織、自治体の要求の批判になります。

(2)登山電車の構成 登山電車方式とは登山電車に乗って、駅を通過するごとに変化する景色を見て、原子力誤解に関して理解を深めていくプロセスをいいます。駅の名前は、始発が誤解駅、順に、科学駅、常識駅、情緒駅、終点がアイデア駅です。誤解駅から出発して、アイデア駅にいたろうとするものです。駅の各区間で、誤解の科学的理解、常識の導入、情緒との折り合いのつけ方、志の涵養と実行計画立案、のそれぞれについて進化していくプロセスを経ます。先に述べた目的についてさらに敷衍してみましょう。

- イ) 第一のプロセスが誤解駅から科学駅にいたる ‘理解電車’、
- ロ) 第二のプロセスが科学駅から常識駅に向かう ‘常識電車’、
- ハ) 第三のプロセスが常識駅から情緒駅に向かう ‘情緒電車’、
- ニ) 最後のプロセスとして情緒駅からアイデア駅に向かう ‘志の電車’、

の4段階に別けています。その主な理由は、原子力誤解は普通の誤解と異なり情緒が強く絡むことにあります。頭で理解しても心で納得しないことはいくらでもあります。心で判らなければ、理解は行動に結びつきません。

一言でいえば、科学的理解だけでは行動に結びつきません。科学的理解には行動基準としての常識的判断が入る余地はありません。1mSvの問題は頭でわかって心で納得しないから、1mSv以下の除染を要求して止まないのです。そのために、膨大な税金の無駄遣いが数年続いているのです。従って常識電車に乗って ‘常識化’ に関する対話をする必要がでてきます。またこの対話が功を奏して、判断に常識的要素を交えることができるようになって、先入観に左右されやっぱりに入らない、ということもあり得ます。そのときどうするか、が重要ですが、情緒電車に乗ってもらい適宜な対話を更に続ける必要がでてきます。ここでの関門を通過すると、志の電車に乗って志に目覚め、日本という国の世直しに参加してもらえる可能性がでてくるのです。こうなってはじめて、最後の目標、原子力誤解の払拭、が達成できたことになります。こういった一連の理解プロセスが ‘草の根対話活動’ の基本として利用されることを期待しています。

【参考】

文献1：「ファスト&スロー」ダニエル・カーネマン著 ハヤカワノンフィクション